

ずいそう

二枚の写真

鈴木 力



子供の頃、買ってもらった地球儀をよく眺めていた。ロンドン、サンフランシスコ、サンパウロ、ニュージーランド、カムチャツカ、バイカル湖 etc. の位置を目で追っていた。それらの地に将来、自分が立つとはその頃は思いもしなかった。

初めての海外旅行は22年前にタイへ。それまで外国にはほとんど興味はなかったが、バンコクで何気なく撮った1枚の写真は、戦前から戦中にかけて木材の買付けの商社員だった父が同地で撮った写真と全く同じ場所でのものだった。その後、半世紀以上経っていたが、ほとんど景観は変わっておらず驚いた。当時としては珍しく海外に目を向けていた父は私の子供の時に亡くなったが、何か因縁めいたものを感じ、私に海外に出かけて見聞を広めよと言われているように感じた。

お蔭さまでその後、家内とともに27の航空会社を利用し、南半球へ7往復、日付変更線も7往復して、37カ国・10地域に足跡を記すことができた。また間近で2国・1地域の国土を見て、他に少なくとも19カ国の上空を通過した。ツアーの添乗員さんや航空機の乗務員さん等を除くと、多数の国や地域へ行っただと言えるのだろうが、現在、世界には196カ国あるので、訪れた国は2割に、また上空を通った国を加えても3割にも満たない。世界は広い。

その間、南極大陸を除き、アジア、ヨーロッパ、北米、南米、オーストラリア、アフリカの6大陸へ少なくとも各2回は行き、また太平洋、大西洋、インド洋、地中海、北極海を航海した。

あまり人の行かないところへの旅行を積み重ねて、その間、様々な体験をすることができた。その幾つかを紹介する。海外旅行では128回空を飛んだが、大きいトラブルは、日本からの出発便の欠航、また燃料漏れで出発が6時間半遅れた、フィンランドで到着機の遅れのため代替機になった、ブラジルで離陸後に緊急着陸した、アラスカのデナリ（マッキンリー山）の遊覧飛行で乱気流に遭い軽飛行機が90度近く傾いた、と何回かあったが致命的なトラブルはなく、こうして生きている。

世界三大瀑布は、イグアス、ビクトリア、ナイアガラの順に見ることができた。

天体・自然現象の皆既日食とオーロラだが、これは人生観が変わる。皆さんも一度で良いからご覧になることをお勧めする。皆既日食は天気次第だが、運の良いことに南京、ケアンズ、イースター島と3回も見ることができた。アイスランドで最初に見たオーロラは肉眼でもはっきりと濃い緑色で、カーテン状に揺らめいていたし、その後もアラスカ、ノルウェー、フィンランドで何回も見つめた。ノルウェーの北の北極海（バレンツ海）では凄い暴風で、他に誰もいない大揺れに揺れる船の甲板で家内と見た。

病気・ケガでは、欧州本土の最北端ノールカップ（ノルウェー）で凍結した地面で転倒、左手首を痛め、帰国後に手首の骨折と判明した。接骨医は私の手首のレントゲン写真を見て驚いたように「しっかりした骨をしている。普通では断面は骨が1/5、神経組織が3/5、骨が1/5だが、あなたの場合は1/3、1/3、1/3となっているためにこれぐらいで済んだ。さもなければ縦方向ではなく間違いなく輪切りのように折れていたでしょう」とのことだった。普通の人の神経組織は3/5だが私の場合は1/3と、数学上は明らかに1/3 < 3/5なので、やはり私の神経は普通の人に比べて「か細い」のだ。自分ではそれほど頑丈な骨であるとは思っていなかったが、丈夫な骨格に産んでくれた両親に感謝した。

あと、ハンガリーで風邪を引いたときは何事もなく帰国できたが、ドイツからの場合は空港での赤外線チェックで別室へ誘導された。風邪気味で、体温計測では38.6℃もあった。体調、滞在地、経由地、搭乗便名、搭乗機の座席番号、帰宅する手段等、色々と医療関係者から聞かれたが、滞在地等からすると問題ないだろうとすぐに帰宅を許された。

いろいろな経験を書き出すとキリがないが、特に奇抜だったアフリカでの体験では。

ヨハネスブルグからザンビアへ行く飛行機で全員が着席すると、客室乗務員が殺虫剤？のスプレー缶を手にして客室内を往復で噴霧して回る。強烈なアースの

ような臭いはしばらく機内に立ち込め、虫よりも人間に効き目がありそうだ。

ザンビアとジンバブエの国境にあるビクトリアの滝は、台地の割れ目状で、落差108m、因みにナイアガラは51m、イグアスは2段の合計で82mである。乾季のため落水は一部で、断崖絶壁の上からはダム堰堤から谷底を見る感じであった。

ジンバブエでの夕食時、現地の女性が鉄板でモパネワームという芋虫を焼いてくれる。“芋虫を食べた”という証明書がもらえた。男性がBQを焼いて「ワニ〜」「インパラ〜」「ヤサイ〜」と日本語でアナウンスする。ワニの肉は少し堅いが鶏のササ身と同じ食感だった。

ジンバブエのホテルの警備員は銃を持っていた。人間に危害を及ぼす動物が来ることもあるのだろう。庭には野生のイボイノシシが野犬のように上目遣いに私を見上げながらすぐ横を小走りに駆け抜けていった。

ジンバブエとボツワナとの国境付近で野火に遭遇した。前が見えないくらいの煙が道路を覆う。炎がチロチロと見え始め、やがて道路の両側はすさまじい炎と煙で、バスの窓ガラス越しにかなりの熱気を感じた。

ボツワナでのこと。ザンベジ川の支流では、カバと少し離れたところで人間の子もたちが大勢泳いでいる。「え〜っ、こんなところで」と心配したが、やはり毎年のようにワニに襲われて命を落とす子がいるようだ。やはりアフリカでは遊ぶのも命がけのところがあるのだ。日本でも交通事故等で危ないが。

夕食時、レストランの後を流れる川の対岸の隣国ナミビア側で、暗い中でかなり広範囲に野火が勢いよく炎を上げている。まさに“対岸の火事”で、こちら側からは不気味だが綺麗であり高みの見物であった。

朝、サファリに出かける。地平線の上に真っ赤な太陽が昇ってきた。だが、夜の間に肉食獣に襲われ、この夜明けを迎えることができなかった動物たちがいると思うと、何か複雑な心境だ。

南アフリカの喜望峰は最高の天気だったが、楽しみにしていたケープタウンのテーブルマウンテンは強風で登れない。私はどうも山には縁がないようで、リオデジャネイロのポン・デ・アスーカルという岩山では時間がなく、また国内だが北海道の函館山も何度行っても強風等で登れない。

ケープタウンからプレトリアまではロボス・レールという2泊3日の豪華寝台列車の旅だった。同じ区間をブルトレインという寝台特急は1泊2日で走るが、

この列車はあと1日かけて走り、途中2つの駅に観光停車する。寝台車は1車両3室で、機関車2両、厨房車、食堂車2両を合わせて計22両編成というもので、最後尾はバーラウンジのある展望車となっている。展望車から見たアフリカの大地の漆黒の闇と、空に輝く星々に感動した。

南アフリカの10月は春で、プレトリア市内では7万本というジャカラの花が満開であった。市内の交差点に立つと、前後左右の道路は紫色の花に覆われ、その木々の下の地面も落花の紫色に覆われている。見事だ。

アフリカ以外では、タヒチでは南十字星がきれいに見え、中国ではサソリを食べ、8月のアラスカでは雪に降られ、ロットネスト島で“世界一幸せ”な顔のクオッカと遊び、カナリア諸島では空の青さを知り、ロシアの大地をシベリア鉄道で走り、ウユニ塩湖では“天空の鏡”を見てさらに真っ白な塩の平原を歩いた。

私はとくに英語をスラスラ話せるわけではないが、関係代名詞・何人称・過去形だのと学校で教える文語調の文法などはっきり言って関係ない。要はボキャブラリー（語彙）と易しい言葉で、伝えようという意味があれば通じるものだ。あとその国の「おはよう」「ありがとう」くらいの挨拶語を知っていれば何とかなる。皆さん方もぜひ海外へ出掛け、様々なカルチャーショックを味わうのもよいのでは。でも、くれぐれも「旅の恥はかき捨て」などはなさらぬように。

最後にもう1枚の写真がある。

2011年3月、オーロラを見るツアーでアラスカへ出掛けた。フェアバンクスからの帰路、飛行機は東北地方の海岸線に達した。10日13時04分、機上から海岸線の写真を1枚撮った。だがこの25時間42分後（11日14時46分）にM9.0の巨大地震が起き、津波が海岸を襲い、さらに原発事故が続いた。この時、何気なく撮った写真にはその原発が写っている。この時、人々はごく普通に生活し、明日を夢見ていた人も多くいたことだろう。それがあの時を境に…。

お亡くなりになられた2万人の方々を悼み、ご家族、ご親戚、お知り合いの方々に哀悼の意を表し、被災された方々の1日も早い復興をお祈りしてやみません。